

0.1 H22 数学 A

(1) f は一様連続であるから任意の ε に対して $\delta(\varepsilon) > 0$ が存在して $|x - y| < \delta(\varepsilon)$ なら $|f(x) - f(y)| < \varepsilon$ である. また $\{g_n\}_{n=1}^{\infty}$ は一様収束するから $\delta(\varepsilon)$ に対して, $N \in \mathbb{N}$ が存在して $n > N$ なら $|g_n(x) - g(x)| < \delta(\varepsilon)$ である.

以上より, $n > N$ なら $|f(g_n(x)) - f(g(x))| < \varepsilon$ である. したがって $f \circ g_n$ は $f \circ g$ に一様収束する.

(2) $h_n(x) = \sum_{k=1}^n \frac{\cos(kx)}{k^2}$ とする. $|h_n(x) - h(x)| = \left| \sum_{k=n+1}^{\infty} \frac{\cos(kx)}{k^2} \right| \leq \sum_{k=n+1}^{\infty} \frac{1}{k^2} \rightarrow 0 \quad (n \rightarrow \infty)$ である. したがって一様収束.

また $\sin x$ は一様連続である. これは平均値の定理から $\sin x - \sin y = (x - y) \cos \xi \leq |(x - y)| \quad (\xi \in (x, y))$ より明らか. (1) より $\alpha_n(x) = \sin(h_n(x))$ は $\sin(h(x))$ に一様収束する.

[2] (1) $X = \begin{pmatrix} a & b \\ c & d \end{pmatrix} \in V$ を任意にとる. $X = X^T$ であるから $b = c$ である. したがって $X = aE_1 + bE_2 + cE_3$ と表せる. また $c_1E_1 + c_2E_2 + c_3E_3 = O$ とすれば $c_1 = c_2 = c_3 = 0$ は一次独立. したがって V は $\{E_1, E_2, E_3\}$ を基底とする.

(2) $(A^T X A)^T = A^T X (A^T)^T = A^T X A$ であるから $f_A(X) \in V$ である. $f_A(cX + Y) = A^T(cX + Y)A = cA^T X A + A^T Y A = cf_A(X) + f_A(Y)$ であるから線形写像である.

(3) $f_A(E_1) = \begin{pmatrix} 1 & a \\ a & a^2 \end{pmatrix} = E_1 + aE_2 + a^2E_3, f_A(E_2) = \begin{pmatrix} 2a & a^2 + 1 \\ a^2 + 1 & 2a \end{pmatrix} = 2aE_1 + (a^2 + 1)E_2 + 2aE_3, f_A(E_3) = \begin{pmatrix} a^2 & a \\ a & 1 \end{pmatrix} = a^2E_1 + aE_2 + E_3$ である. よって f_A の表現行列は $\begin{pmatrix} 1 & 2a & a^2 \\ a & a^2 + 1 & a \\ a^2 & 2a & 1 \end{pmatrix}$ である.

(4) f_A の表現行列を $G(a)$ とする. $\det G(a) = \begin{vmatrix} 1 & 2a & a^2 \\ 0 & -a^2 + 1 & a - a^3 \\ 0 & -a^3 + a & 1 - a^2 \end{vmatrix} = -(1 - a^2)^2 - (a - a^3)^2 = -(a^2 + 1)(1 - a^2)^2$ である.

したがって $a \neq \pm 1$ のとき $\det G(a) \neq 0$ であるから $\text{Im } f_A$ の基底は $\{f_A(E_1), f_A(E_2), f_A(E_3)\}$ である.

$a = 1$ のとき $G(1) = \begin{pmatrix} 1 & 2 & 1 \\ 1 & 2 & 1 \\ 1 & 2 & 1 \end{pmatrix}$ である. よって $\text{Im } f_A$ の基底は $\left\{ \begin{pmatrix} 1 & 1 \\ 1 & 1 \end{pmatrix} \right\}$ である.

$a = -1$ のとき $G(-1) = \begin{pmatrix} 1 & -2 & 1 \\ -1 & 2 & -1 \\ 1 & -2 & 1 \end{pmatrix}$ である. よって $\text{Im } f_A$ の基底は $\left\{ \begin{pmatrix} 1 & -1 \\ -1 & 1 \end{pmatrix} \right\}$ である.

[3] (1) $S = \{(-\infty, n) \cup \{p_1\} \mid n \in \mathbb{N}\}$ とする. S は X_1 の開被覆である. 有限部分被覆を持たないからコンパクトでない.

(2) ユークリッド位相の入った位相空間 \mathbb{R} を E で表す. E の開集合は X_2 の開集合であることを示す. E の開基として $\{(x_0 - \varepsilon, x_0 + \varepsilon) \mid x_0 \in \mathbb{R}, \varepsilon > 0\}$ がとれる. $\frac{1}{n_1} \leq \varepsilon < \frac{1}{n_1+1}$ として n_1 を定める. n_i を $\frac{1}{n_i} \leq \varepsilon - \sum_{j=1}^{i-1} \frac{1}{n_j} < \frac{1}{n_i}$ として定める. ただし $\varepsilon - \sum_{j=1}^{i-1} \frac{1}{n_j} = 0$ のとき n_i は定めない. n_i が定義される i を集めてできる $A \subset \mathbb{N}$ を定める. このとき数列 $\{n_j\}_{j=1}^{\max A}$ を得る.

$\bigcup_{i=1}^{\max A} (x_0 - \sum_{j=1}^i \frac{1}{n_j}, x_0 - \sum_{j=1}^{i-1} \frac{1}{n_j} + \frac{1}{n_i}) \cup (x_0 + \sum_{j=1}^{i-1} \frac{1}{n_j} - \frac{1}{n_i}, x_0 + \sum_{j=1}^i \frac{1}{n_j} + \frac{1}{n_i}) = (x_0 - \varepsilon, x_0 + \varepsilon)$ である. よって E の開集合は X_2 の開集合である.

$\varphi: X_2 \rightarrow [0, 1]$ を $\varphi(p_1) = 0, \varphi(p_2) = 1, \varphi(x) = (\arctan x + \pi/2)/\pi \quad (x \in \mathbb{R})$ とする. $\varphi|_{\mathbb{R}}: E \rightarrow (0, 1)$ は同

相写像であるから φ は全単射. $(x_0 - \frac{1}{n}, x_0 + \frac{1}{n})$ は E の開集合であるから $\varphi((x_0 - \frac{1}{n}, x_0 + \frac{1}{n}))$ は $[0, 1]$ の開集合である. $\varphi((-\infty, n) \cup \{p_1\}) = (0, \varphi(n)) \cup \{0\} = (-1, \varphi(n)) \cap [0, 1]$ は開集合である. よって φ^{-1} は連続. $[0, 1]$ の開集合 U について $U \subset (0, 1)$ なら $\varphi^{-1}(U)$ は E の開集合. すなわち X_2 の開集合. $0 \in U, 1 \notin U$ ならある $\varepsilon > 0$ が存在して $U = [0, \varepsilon) \cup U \setminus \{0\}$ である. $\varphi^{-1}(U \setminus \{0\})$ は X_2 の開集合である. $\varphi^{-1}([0, \varepsilon)) = (-\infty, \varphi^{-1}(\varepsilon)) \cup \{p_1\}$ は X_2 の開集合である. よって $\varphi^{-1}(U)$ は X_2 の開集合. $0 \notin U, 1 \in U$ のとき, $0, 1 \in U$ のときも同様. よって φ は連続. すなわち φ は同相.

(3) p_1 が属す開基は $\{(-\infty, n) \cup \{p_1\}\}$ ($n \in \mathbb{Z}$) である. 任意の $m \in \mathbb{Z}$ について $\{(-\infty, m)\} \cup \{p_3\}$ も開基であるからそれぞれを含む任意の開基は共通部分をもつ. したがってハウスドルフ空間でない.

4 (1)

$$\left| \frac{\log z}{z^4 + 1} \right| = \frac{|\log r + i\theta|}{|r^4 e^{4i\theta} + 1|} \leq \frac{|\log r| + \pi}{||r^4 e^{4i\theta}| - 1|} = \frac{|\log r| + \pi}{|r^4 - 1|}$$

(2)

$$\int_{\alpha_2} \frac{\log z}{z^4 + 1} dz = \int_R^\varepsilon \frac{\log x e^{\pi i}}{(x e^{\pi i})^4 + 1} e^{i\pi} dx = \int_\varepsilon^R \frac{\log x + \pi i}{x^4 + 1} dx = \int_\varepsilon^R \frac{\log x}{x^4 + 1} dx + \pi i \int_\varepsilon^R \frac{1}{x^4 + 1} dx$$

(3) $\partial D_{\varepsilon, R}$ の小さい円弧を C_1 , 大きい円弧を C_2 とする. $|\int_{C_1} \frac{\log z}{z^4 + 1} dz| = \int_0^\pi \left| \frac{\log r e^{i\theta}}{r^4 e^{4i\theta} + 1} i r e^{i\theta} \right| d\theta \leq \int_0^\pi \frac{r |\log r| + r\pi}{|r^4 - 1|} d\theta \leq \pi \frac{r |\log r| + r\pi}{|r^4 - 1|} \rightarrow 0$ ($r \rightarrow 0$) である. また $|\int_{C_2} \frac{\log z}{z^4 + 1} dz| \leq \int_0^\pi \left| \frac{\log R e^{i\theta}}{R^4 e^{4i\theta} + 1} i R e^{i\theta} \right| d\theta \leq \pi \frac{R |\log R| + R\pi}{|R^4 - 1|} \rightarrow 0$ ($R \rightarrow \infty$) である.

また $\int_{\alpha_1} \frac{\log z}{z^4 + 1} dz = \int_\varepsilon^R \frac{\log x}{x^4 + 1} dx$ である.

$\varepsilon < 1 < R$ とする. $D_{\varepsilon, R}$ 内で $\frac{\log z}{z^4 + 1}$ は $e^{\pi i/4}, e^{3\pi i/4}$ を特異点にもつ. 留数を求めると $\text{Res}\left(\frac{\log z}{z^4 + 1}, e^{\pi i/4}\right) = \pi e^{7i\pi/4}/16$, $\text{Res}\left(\frac{\log z}{z^4 + 1}, e^{3\pi i/4}\right) = 3\pi e^{i\pi/4}/16$ である. よって $\int_{\partial D_{\varepsilon, R}} \frac{\log z}{z^4 + 1} dz = \frac{i\pi^2}{8} (3e^{i\pi/4} + e^{-i\pi/4})$ である. よって $\lim_{R \rightarrow \infty} \int_{\partial D_{1/R, R}} \frac{\log z}{z^4 + 1} dz = \frac{i\pi^2}{8} (3e^{i\pi/4} + e^{-i\pi/4})$, $\lim_{R \rightarrow \infty} \int_{\partial D_{1/R, R}} \frac{\log z}{z^4 + 1} dz = 2 \int_0^\infty \frac{\log x}{x^4 + 1} dx + \pi i \int_0^\infty \frac{1}{x^4 + 1} dx$ である. 以上より $\int_0^\infty \frac{\log x}{x^4 + 1} dx = -\frac{\pi^2}{8\sqrt{2}}$, $\int_0^\infty \frac{1}{x^4 + 1} dx = \pi/2\sqrt{2}$ である.